# 阿原端下遺跡発掘調査報告

## 付　御所平遺跡発掘報告

〈土地改良事業に伴う緊急発掘調査〉

1976

富士見町教育委員会

# 序

阿原端下遺跡は，地元木ノ間区の発案により富士見町が設計施行した昭和50年度非補助土地改良（圃場整備事業）木ノ間地区。という土地改良工事により遺跡が破壊されることになったので，事前に発掘調査して記録保存することになった。

調査は，富士見町教育委員会が請負い発掘担当者には井戸尻考古館の武藤雄六と小林公明の２名が当った。

発掘調査に先立って遺跡の性格と範囲を掌握するために表面採集を主体とする予備調査を行なったところ，縄文時代中期初頭と平安時代後期の土器破片および内耳土器破片のほか打製石斧数点などを採集することができた。

遺跡の範疇のうち，折井保太氏の所有する野菜畑（富士見町富士見6148番地）561m² の範囲が原地形が保たれていることがわかった。その他の遺跡地はほとんど水田となっていたため調査の対象外とすることにした。

発掘調査に要した費用約20万円は原因者負担で行ない，発掘人夫は地元中心に富士見地区全域から公募した。報告書を発刊するに当りここに記して感謝の意を表す次第である。

昭和51年３月

富士見町教育委員会

教育長　小 林 繁 治

第１図　遺跡周辺図（１：50,000）

１阿原端下　２城ケ尾根　３広原

４無法塚　５若　宮　６御所平

７小手沢

# 1．遺跡の環境

遺跡は，長野県諏訪郡富士見町木ノ間区の南300mに位置する。この地帯は，フオツサマグナの西縁の断層崖から押出した大小の角礫を包含する砂礫層が発達し砂礫層の上部には褐鉄鉱による鉱染が各部にみられる。この褐鉄鉱は赤色顔料の原料には最適である。

砂礫層の上にはローム層が堆積しているが，この地帯のローム層は比較的薄く原地形に左右された堆積を示し巨礫の混在がある。

表土は場所によって異るが10～50cmの厚さでローム層を不整合に被い，そのうえ径2～3cm程度の小角礫が多量に混人して，やはり断層崖からの供給物であることがわかる。

遺跡のあるのは，断層崖からの押出しが盛上がり丘状を呈する部分の東辺に突出した舌状台地上にあり，台地の先端は釜無山地の古生層に源を発する武智川の開析によって形成した低湿地に接し湧水も存在する。この湧水は集落の発生に欠くことのできない貴重な存在であったろう。

現在、丘状を呈する丘陵とその周辺は悉く墓地になっている。集落はこの丘をとりまくように湧水を中心にして発達し，その後，現在の位置に移動していったのだろう。

# 2．発掘調査の経過

発掘地点は傾斜の比較的強い舌状台地の先端部にあり，幸い開田されずに普通畑であったため破壊されずに原状をとどめていた。

発掘は6月15日に現地測量を行ないグリッドの設定をした。

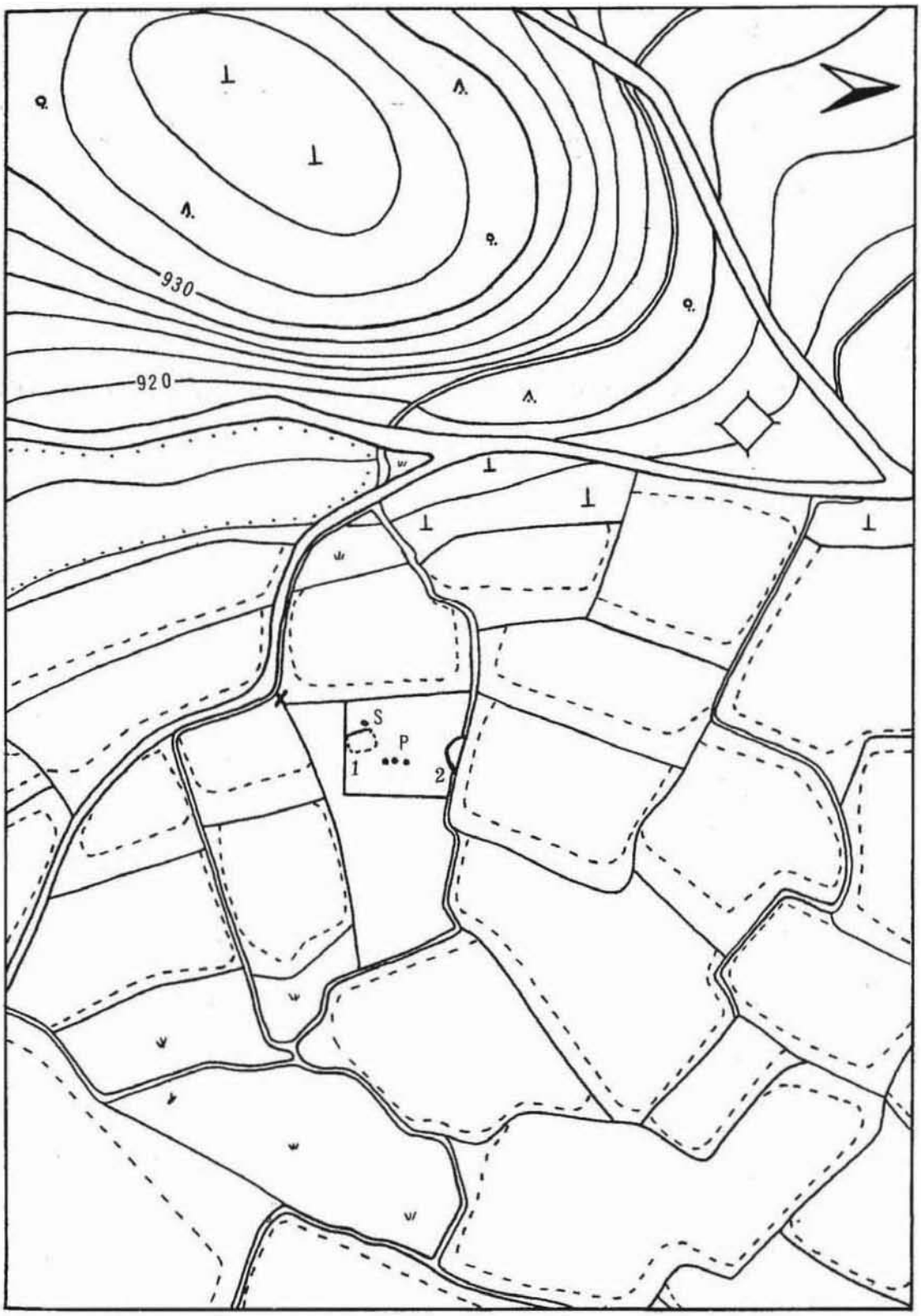
16日から20日までの5日間でグリッドの発掘および住居址などの遺構の調査を完了し，工事の進行に合せ最終的な調査および地形測量の完成したのは7月11日であった。この間，延50人の参加者により現場におけるすべての発掘調査作業を完了することができた。

# 3．発掘の実況と遺構の調査

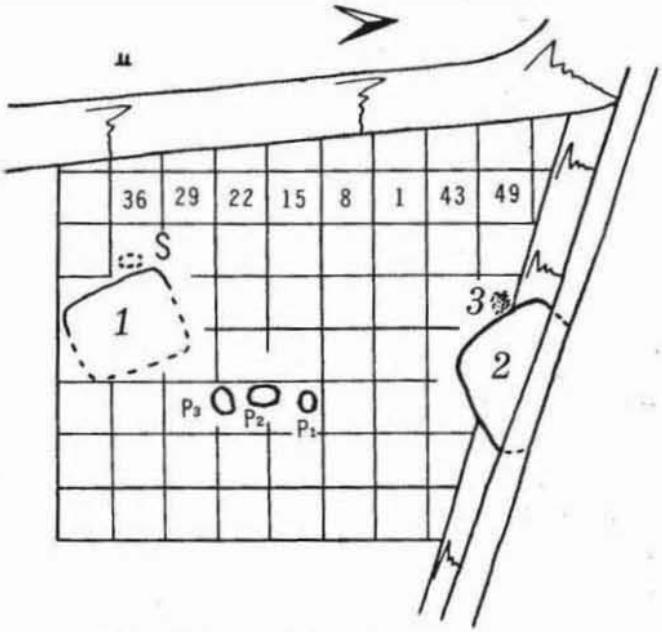
発掘地点に2m×2m・4m$^2$のグリッド53を設定して発掘した。

発掘は地点の南寄りから順次北寄りに向って進めていくことにした。

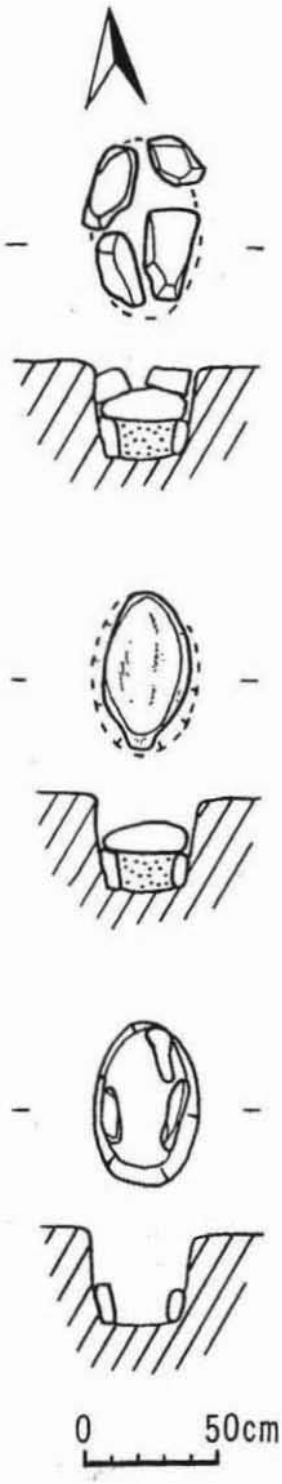
発掘地の南寄りから中央あたりにかけては水田の苗代用に使用するため耕作土の表土は




第2図　遺跡付近地形図（1：1,000）　　×は埋甕発見個所




第3図　グリッド及び遺構配置図



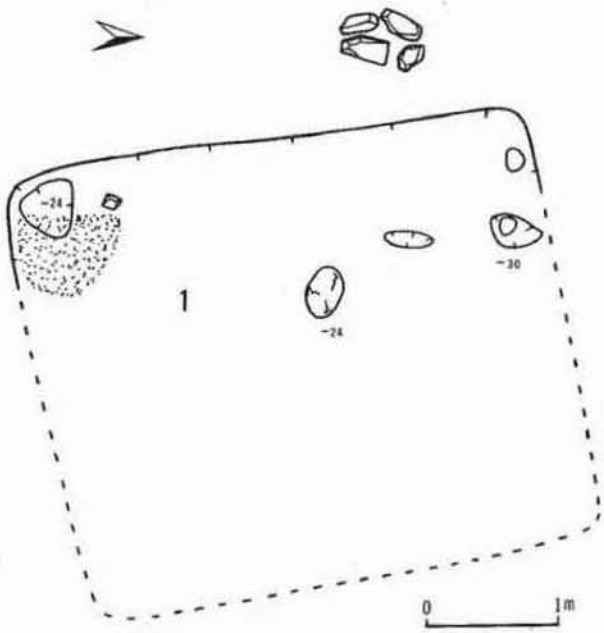

第4図　石組土坑

何年間かにわたって剝ぎ取られ，10cm を残すまでに減少していた。また東寄りは急傾斜のため流失して、やはり 10cm を残す程度となっていたので発掘は捗った。

表土が少なかったので耕作痕がローム面に刻まれている程であった。したがって遺構も遺物もほとんど認められなかった。そのうち，37 グリッドには 40×60cm 深さ 35cm の土坑があった。土坑は三方を平板の堆積岩で囲い，その上に輝緑岩の扁平な蓋石をのせ，更に 4 個の詰石を方形に配した石組土坑であった。内部には単粒化して褐色に汚染を受けたロームの細粒がつまっていただけで，何も無かった。しかし，使用されている岩石がすべて縄文中期末の曽利II式期の石組土坑に用いられていることと埋ガメを伴う遺構との関連から曽利II式期の石組土坑であろう。

この石組土坑のすぐ東寄りには 3.5×3.9m，主軸の方向南北で長方形の住居址が認められた。この住居址は前述のように耕作により破壊されていたが，西隅に焼土だ

け残されたカマドが検出できた。遺物は土師器および灰釉陶器の破片が1～2点ずつと，ほかに九兵ヱII式土器破片・角釘・石器のチップなどが散見されただけであった。土師器・灰釉陶器以外は耕作による混入と考えられる。この住居址を第1号住居址と呼称する。



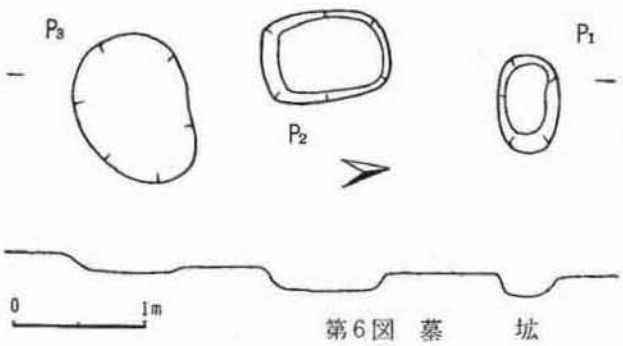
第5図　第1号住居址と石組土坑

発掘が中央部に進むにしたがい耕作土を含む黒色土層は深さを増し35～55cmに達する程に厚くなる。それにともない遺物の量も増加しはじめる。

29～42グリッドでは1号住居址を除いて遺物の発見が皆無であったが、中央部の8～28グリッドにかけては表面近くに中世の内耳土器の破片や鉄製の角釘が，ローム面上15～20cmの縄文時代の地表面には西寄りに九兵ヱII式土器破片が、総体的には打石斧とそのチップおよび黒曜石片などが散見された。

なお，この地帯では縄文時代の地表面とローム面にかけて炭粒が混在し、ローム面にははげしい凹凸が認められた。焼畑の痕跡に類似するものであろうか。

次に中央部の東寄り19・26グリッドには3基の墓坑が検出できた。そのうちNo 1は50×30cmの隅丸長方形を示し，真黒の腐蝕土が充満していた。また，ほぼ中央の腐蝕土中から開元通宝1点・大観通宝1点・政和通宝1点・洪武通宝2点・永楽通宝1点の計6枚の中国銭が発見された。これらの中国銭は上層から二枚が，下層に3枚がそれぞれ癒着して発見された。土葬墓であろう。



第6図　墓　　坑

・No 2の墓拡は80×55cm深さ18cmで，やはり黒色の腐蝕土が充満していた。遺物は内耳土器破片1点と角釘1点とを発見することができた。No 1と同様に中世の墓坑であったのだろう。

墓坑No 3は115×85cm深さ

9cm で，これも腐蝕土が充満していたが浅かったので遺物の発見はなかった。

発掘地点の北西寄りで44・45・50・51・52グリッドにかけて，東に向って傾斜するローム面上10～15cm の黒褐色土層中にやや硬い面があり，九兵エII式土器破片が集中的に発見された。

そこで，この面を詳細に調査したが住居址に係る遺構を検出できなかった。一段下げてローム面上も調査してみたが，柱穴などは発見できなかった。ただ北寄りに焼土を伴った炉址が検出されたので，一時的な生活面としてとらえることができた。生活面の範囲は径4.5m の円形プランを示すことが遺物の分布により判明できた。なお，炉址は当初埋甕炉であったのが後世に土器を抜かれたものであろう。この生活面を調査の途上で第3号住居址とすることにした。

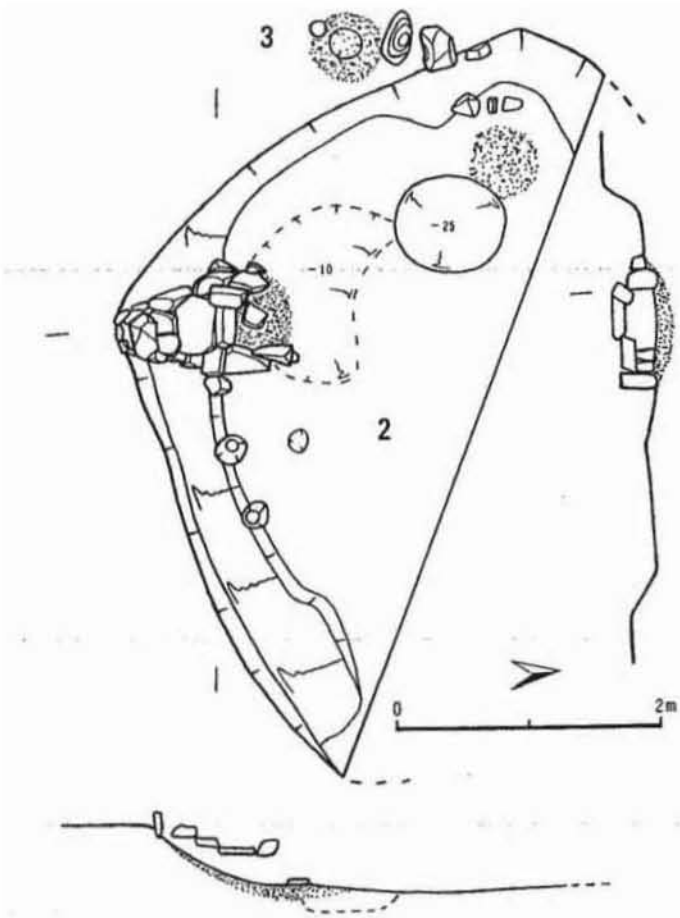
第3号址の北東寄りには土師器・灰釉陶器破片を包含する落込みが認められた。この落込みに係る住居址を第2号住居址とした。

第2号住居址の南辺から南寄り付近一帯の47・48グリッドのローム面上10cm の黒色土層中には新道式土器破片と打石斧・横刃形石器などの遺物が点在する遺物包含層が認められたが，第3号址の場合のような生活面を確認することはできなかった。

第2号住居址の調査に移ると，輝石安山岩の平板石3個を直立させ土器破片を支えた煙道口が西隅に現われた。この土器破片は九兵エII式に伴う関西系の船元式並行の土器であった。堆土は真黒の腐蝕土で極めて軟かく西寄りでは九兵エI式土器を，東寄りでは新道式土器破片のほか石ヒ・凹石・石鏃・黒曜石の剝片など縄文時代の遺物も含まれていた。

第2号住居址はローム面下30～80cm の深さに掘下げられた竪穴住居址で遺構の保存は極めて良好であった。ただ，遺構の東半分程が用水汐によって破壊されてしまっていたのが残念であった。遺物は壁上から床面に及ぶ全面に遺存していた。それらは，土師器・須恵器・灰釉陶器が主で100片以上に達した。ただし完形土器は1点もなかったが，墨書のある土器破片が4点もあり，そのうち1点には「大」の字が明記されていた。土器のほかには鉄製品の残欠1点が発見された。

第2号址は、1辺が4m の方形プランを示し，西隅には石積み粘土貼りのカマドがあった。カマドは両側が二重に構築され天井石には多量のタールが付着していた。焚口の焼土は厚く15cm に及んでいた。また，北隅にはカマドの残欠があり，焼土と6個の石が残されていた。このように、カマドの移築が行なわれたことから，この住居は相当長時間使用されたことが判明した。床面は側壁の周辺を除き貼床となっており，部分的に深い個所が認められた。この深い部分からは新道式土器破片が多く発見されたので，この第2号址は，側壁直下の貼床でない部分を除き，その中央部の貼床の部分に縄文時代中期の新道式期の




第7図　第2号住居址

住居址があり，その住居址を破壊し埋立てて構築されたことが判った。したがって，側壁外の47・48グリッドに新道式土器が多く見出されたことが頷けるほか，さらに、この第2号址は第3号址をも削って構築されたことは勿論である。

新道式期の全面的に破壊されていた住居址の残欠を第4号住居址としたい。第4号住居址のプランは径3.5～4mの円形プランが想定されるが，遺構の大部分は第2号住居址によって破壊され全貌を窺い知ることは不可能であった。

発掘予定地点の調査終了後、工事中に石組土坑の西9mの用水汐中から縄文時代中期末葉の曽利II式期の埋甕が発見されたが，工事や用水汐によって遺構はすでに破壊されていたため確認することはできなかった。埋甕のほか灰釉陶器の破片と内耳土器の破片などが工事中に発見されたが，それらは，水田の開田の際すでに破壊されていた遺構からのものであろう。

（武藤　雄六）

# 4．遺　　物

## 1）縄文時代の遺物

前項で述べたように，縄文期の遺物は，九兵衛尾根II式期の3号址と新道式期の4号址に由来すると考えられる。出土した土器片は整理箱1個弱であるが，そのうちから一定程度の大きさと特徴をもっているものを8～10図に示した。また，石器は11～13図の24点が出土した。他には打石斧チップと黒曜石の屑がある。

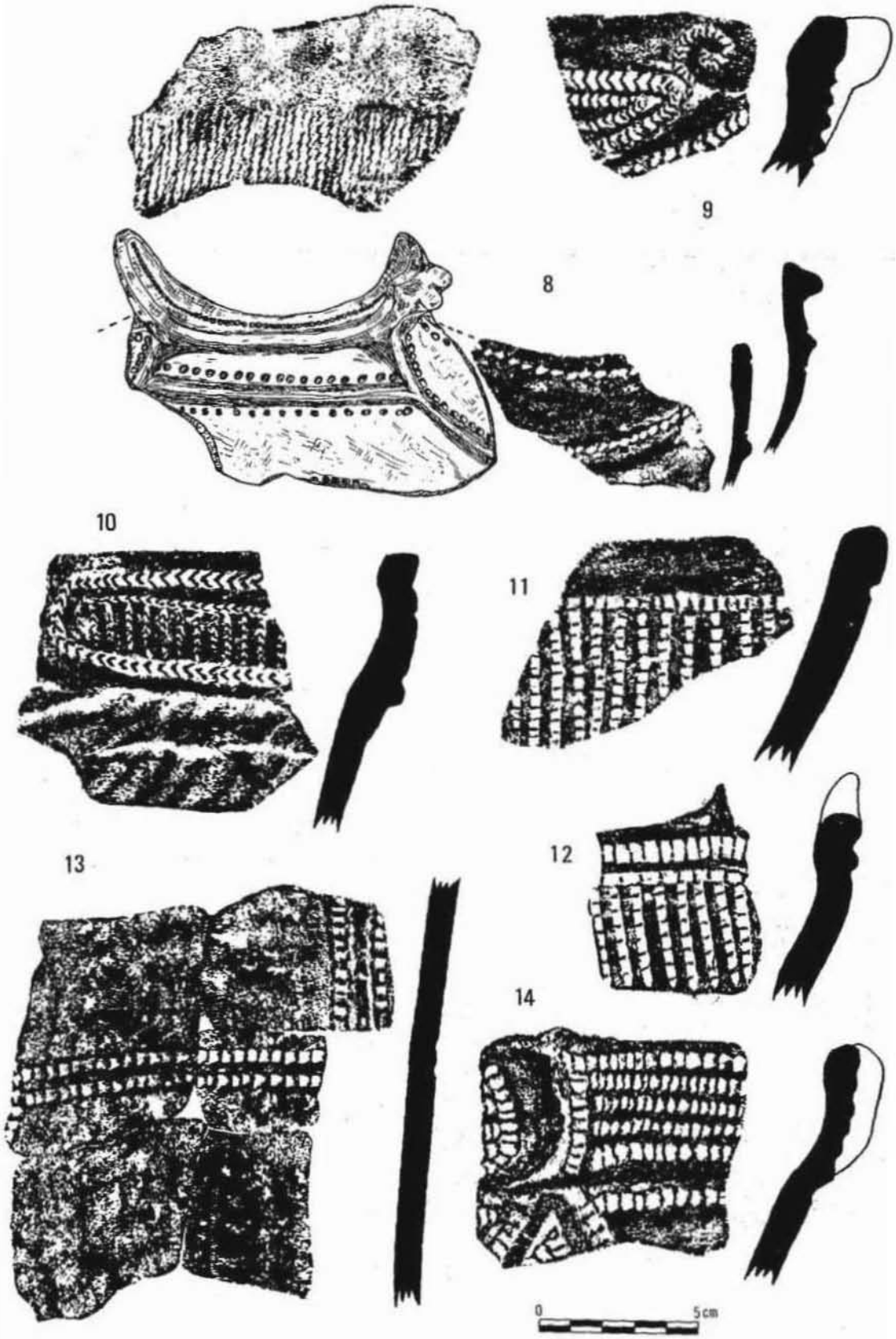
### 土　　器

1～7は九兵衛尾根II式土器である。1は頸部が多少くびれ7のような底をもつ深鉢形であり，2，4，5はのっぺりと外反した口頸部が筒長な胴部に移って5，6のような張出底で終る深鉢となる。1は結節縄文にクサビ状の連続区画文が施され交互沈刻文もみえる。2は鋭いタッチでクサビ状区画文が篦切りされ，四角押引文が加えられている。3は縄文の上を平行線文が下り，胎土には粗い長石粒と金雲母が目立つ。4は目の込んだ押引文を添えた弱い隆帯で区画され，隙間にはジグザグの押文が施されているが，胴部には別の隆起線文がつけられている。5は弱い隆線と沈線による山形の区画文のほか，胴部はザラッとしたアバタ面のまま放置されている。胎土の結合力が悪く手擦れでザラザラと粉末化する。22の有孔鍔付土器（図上復元）は、器形，無文である点、細かい金雲母がとんだチョコレート色の色調などから判断して、この時期の所産と思われる。

ところで，8は2号址のカマドの煙道口の支えに使用されていた口縁部片である。山形に起伏する口縁のこの部分は，ゴンドラのような造形をなし，乳房のように双のふくらみを表現して，竜骨を示すごとく一条の連続刺突文を押引いている。口縁の形に従っては連続刺突と突帯が頸部をめぐり，口縁内面には撚糸文が転がされている。胎土に粗い砂粒を含む割には器壁は薄く，色調は白褐色を呈する。このように全く異質な諸特徴をもつ土器は，微量ではあるが九兵衛尾根II式期にみかけることがあり、関西の船元式系の範疇に入るものと思われるが，個体の特別な部分だけが姿をとどめて平安期の住人によって再び利用され、今日まで遺るに至った運命には興味をそそられる。

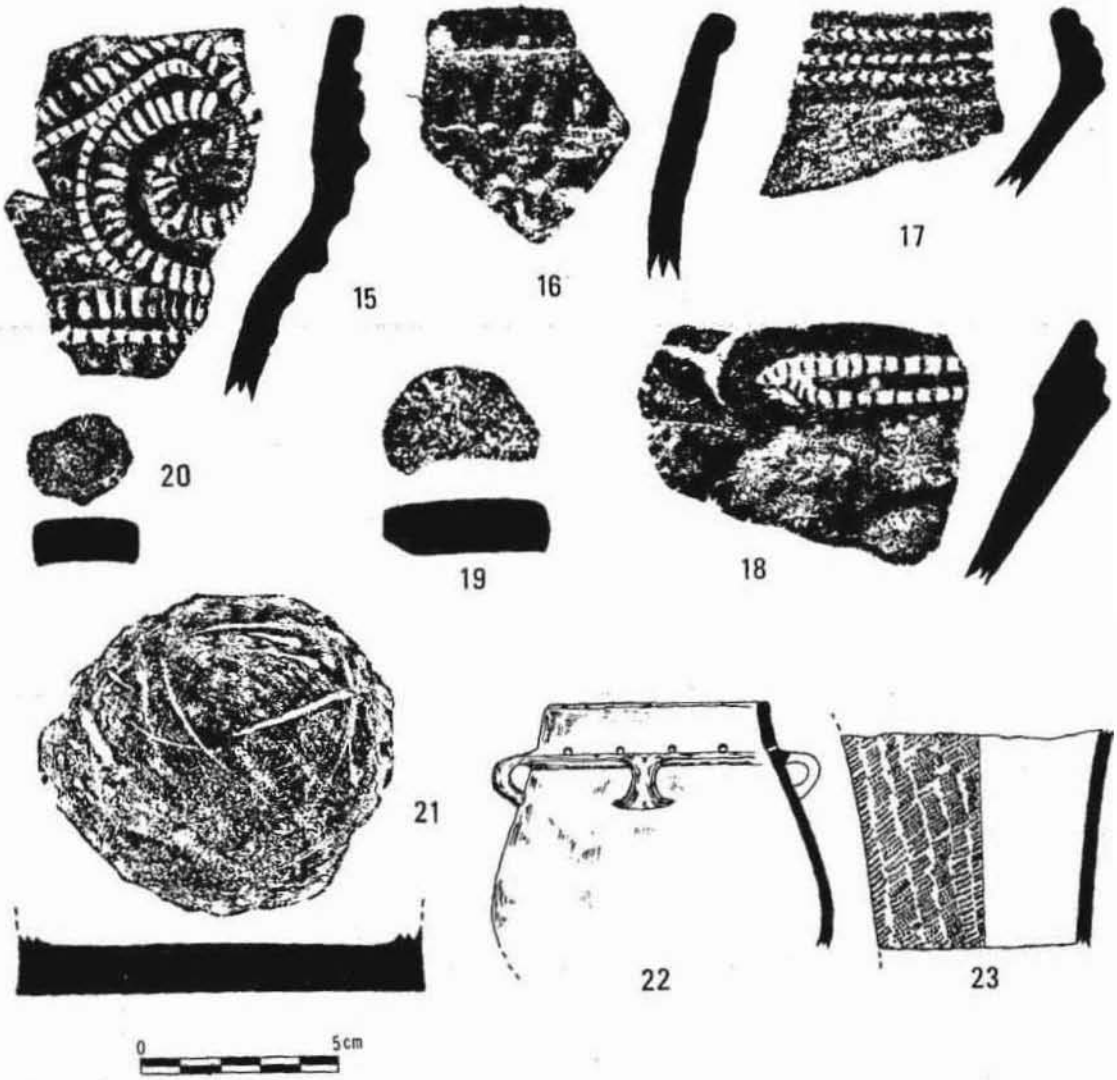
次に、9～18に新道式土器を示した。9，10，17はは新道式の目印である三角押引文を備えている．11，12，18は貉沢式期の遺風である長めの四角押引文が深く印され，14と15は藤内I式のキャタピラ文の前兆である幅の広めの押引きが行なわれている。13はかなり間隔のつまってきた四角押引文と下垂する隆線文が付けられている。また，10と16は輪積

第8図　阿原端下遺跡出土縄文式土器拓影






第9図　阿原端下遺跡出土縄文式土器拓影

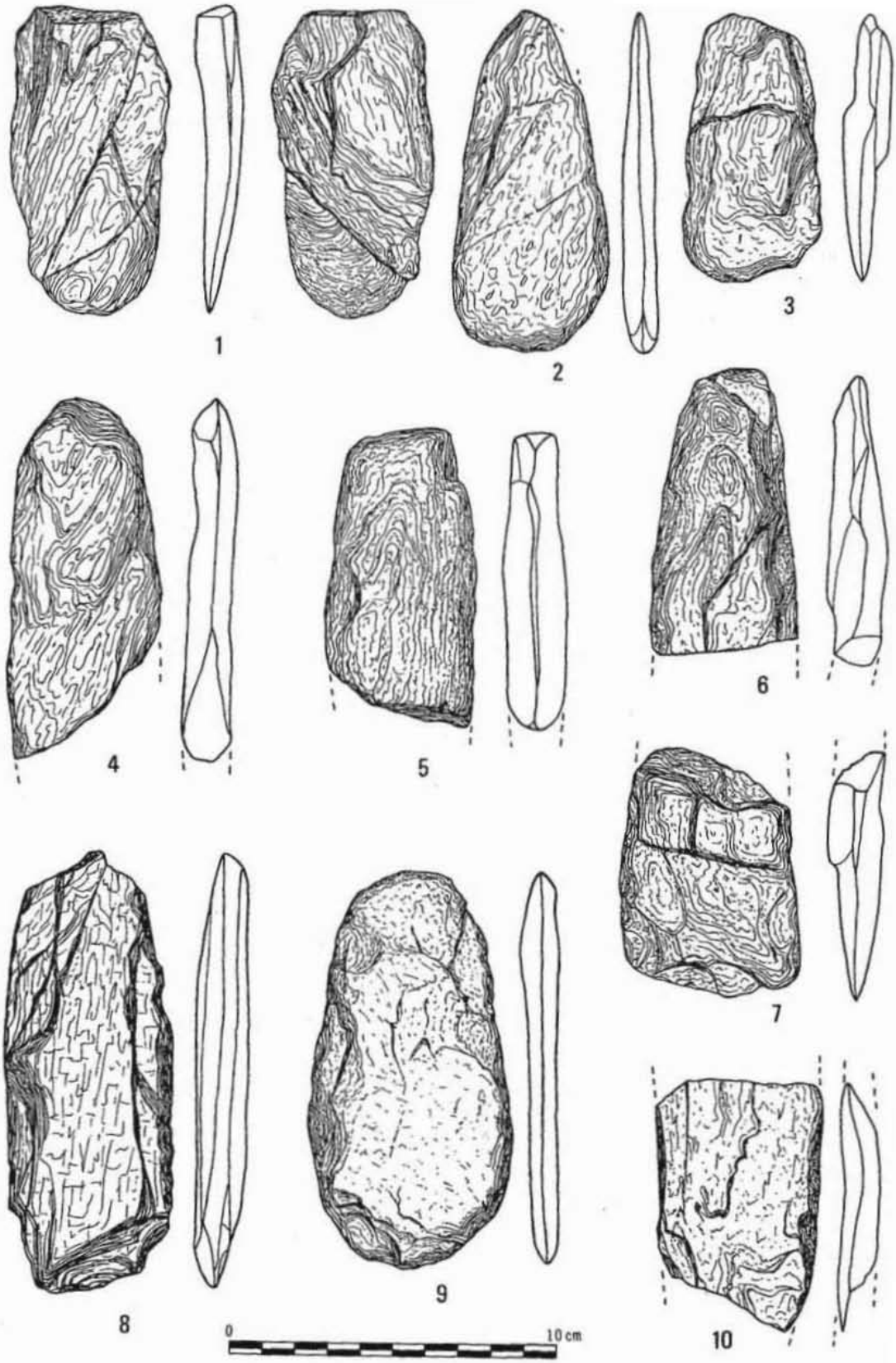



第10図　阿原端下遺跡出土縄文土器拓影実測図　　(22, 23はS＝$\frac{1}{4}$)

痕を留めおいて地文効果を出している。以上は17と18が浅鉢であり、他はみな深鉢形となる。

19, 20は土器片円盤である。胎土・色調から察して九兵衛尾根II式土器片と思われ、19は底部を利用している。また21は同じく九兵衛尾根II式土器の底であるが，内面に無雑作を引掻きが印されていてそれが魚形のように見える。また外底は一面に白く蠟質なものが密着しているのが注意をひく。実験によれば，獣脂などを塗って土器を焼いた場合そうなることが知られている。

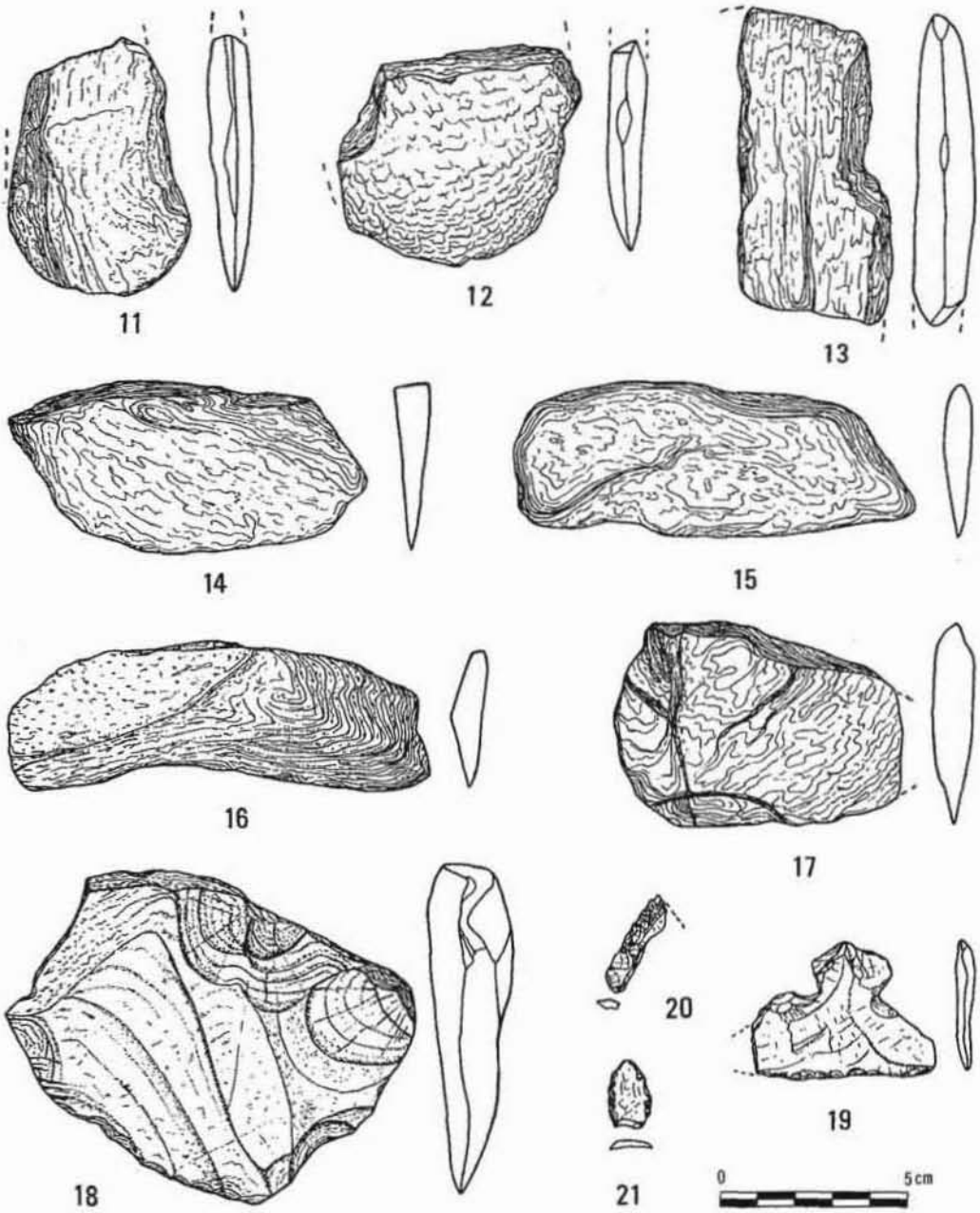
23は発堀区の南西付近から工事中に発見された曽利II式の埋甕である。縄文の地文をもつ外面はしっかりしているが，内壁はザラザラに荒れ，炭化残滓が付着している。




第11図　阿原端下遺跡出土石器実測図

## 石　　器

1～13は打製石斧である。石質は1～7が粘板岩ホルンフェルスで薄片状に白い風化をみせている。その中で1は，頂部に1次剝取面を残す石片を用い腹背が彎曲している。穂先は円く減り，背面には使用痕が片理に従う等高線状の縞文様を浮き出たせていることから、



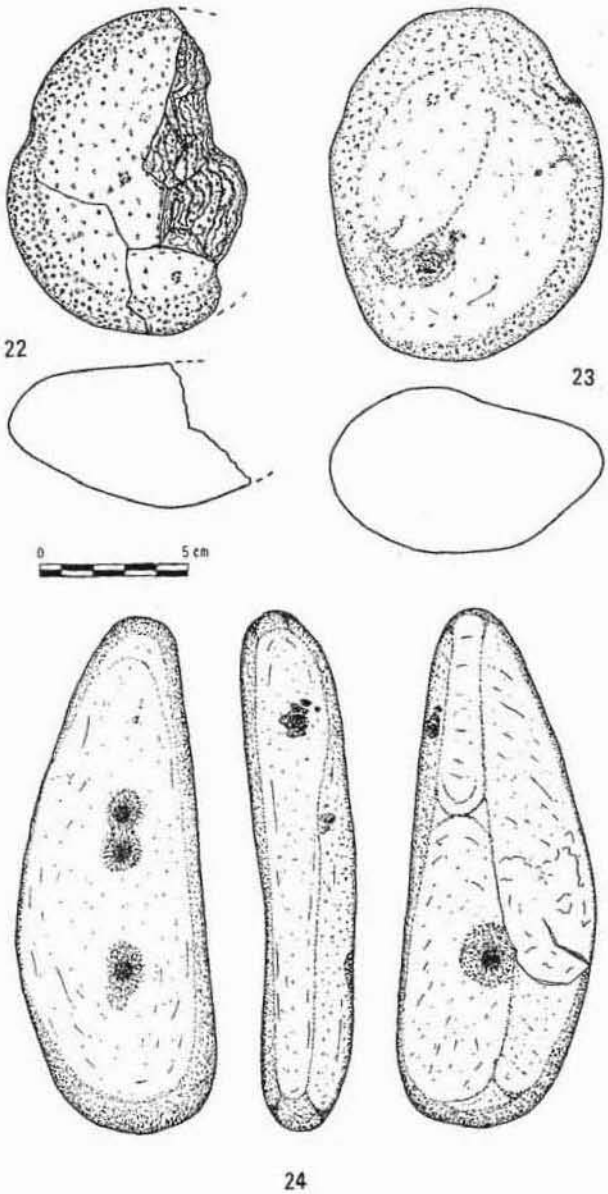

第12図　阿原端下遺跡出土石器実測図

明らかに石鏃といえるものである。8はスレート製で加工の難しさから側辺の稜は厚い。9は輝緑岩製で周縁は比較的こまめに加工され、刃部は丸く摩滅している。10は硬砂岩，11，12は砂岩質の変成岩を用い，12はささくれ状の使用痕をとどめている。13は肩部に抉りを入れられた縦型石ヒのような形態で，千枚岩製。

つづいて，14～17は白く薄片状に風化したホルンフェルスの横刃型石器である。断面がクサビ形を呈し薄身である点が共通している。

18は分厚い頁岩製の剥片石器である。刃部は片面加工されているが，頂部は交互剥離を試みた挙句に諦めたようである。19は粘板岩製の石ヒである。

20は石鏃の片脚部であろうが，透明黒曜石の剥片がカールしていたため加工途上で破損したことが窺われる。21は質のよくない半透明黒曜石製であるが，凹面の側は剥離できないので剥片鏃となっている。




第13図　阿原端下遺跡出土石器実測図（1：2.5）

22，23は輝石安山岩製の凹石ないしは磨石。22は3号址の炉端に添えられていたので火熱で割れが入り，23は片面に手触りのよい磨痕が認められる。24は鰹節形の凹石で石質は輝緑岩。凹面に3個所，裏の凸面に1個所の浅い凹穴を有し、側面には乱れた刺突痕が見られる。中期末葉の所産であろう。

（小林公明）

## 2）平安時代の遺物

本調査では，平安時代の住居址2軒が検出された。遺物は少ないが全て住居址出土である。

### 1 号 住 居 址

遺物は極めて少なく，灰釉陶器の抔形土器が床面直上から1点出土しただけで（14図1），外反気味の付高台をした高台抔で，糸切痕が認められ，糸切後に付高台をした事がわかる。

本址は灰釉陶器1点の出土であるが，平安時代後半に属すると考えたい。

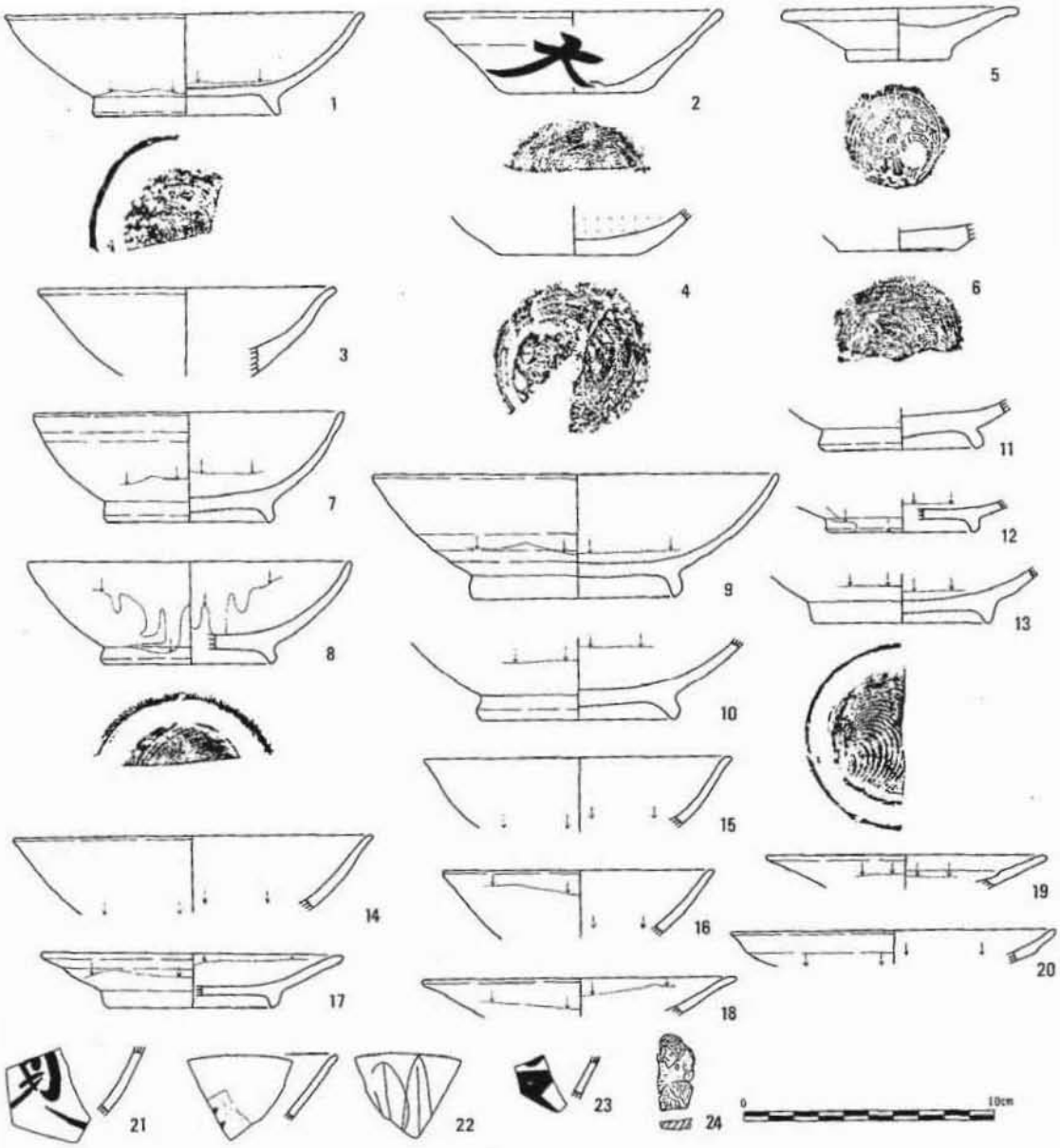
### 2 号 住 居 址

出土遺物には土師器・須恵器及び灰釉陶器がある。

土師器は，抔形土器3点で（14図2～4）完形品はなく，全てロクロ整形で焼成は一般的なもので，2は内外面とも赤褐色を呈す半個体品で，体部外面に正位に「大」と墨書されている。なお破片のため読解不明の墨書土器が3点あり（14図21～23），これも全てロクロ整形の土師器抔形土器で体部外面に黒書されている。21は内面黒色研磨したもので焼成はあまり良くない。22・23は胎土が緻密で焼成は良く硬くしまっていて内外面とも赤褐色を呈し，22は足場遺跡及び小六石遺跡出土例にみられるもの同様に，ロクロ整形後にヘラ削りする技法を用いた隣県山梨に分布の中心を持つものである。4 は口縁部を欠損する内面黒色研磨したものである。皿形土器1点は（14図5 ），カマド内出土のほぼ完形品で，ロクロ整形で焼成は一般的なもので，厚い糸切底に特徴があり，一見フタとも考えられるもので，町内では小母沢遺跡と手洗沢遺跡1号住居址から各1点発見されている。また諏訪市荒神山遺跡からの出土例も聞き，県下にも分布している様であるが，これも隣県山梨に分布の中心を持つものであろう。14図6は底部のみで抔形土器か皿形土器かその器形を明確にできないものである。

灰釉陶器は、抔形土器が10点で（14図7～16）完形品はない。7～13は外反気味の付高台をした高台抔で，7・13は1同様に糸切後に付高台をした事がわかるものである。皿形土器は4点で（14図17～20）完形品はない。17は外反気味の付高台をした高台皿で，19は段皿である。この様に灰釉陶器が比較的多く出土し，灰釉陶器のありかたに注意する必要があろう。

鉄製品は（14図24）の1点だけであった。酸化の程度が極度に進んでいたため何だかは



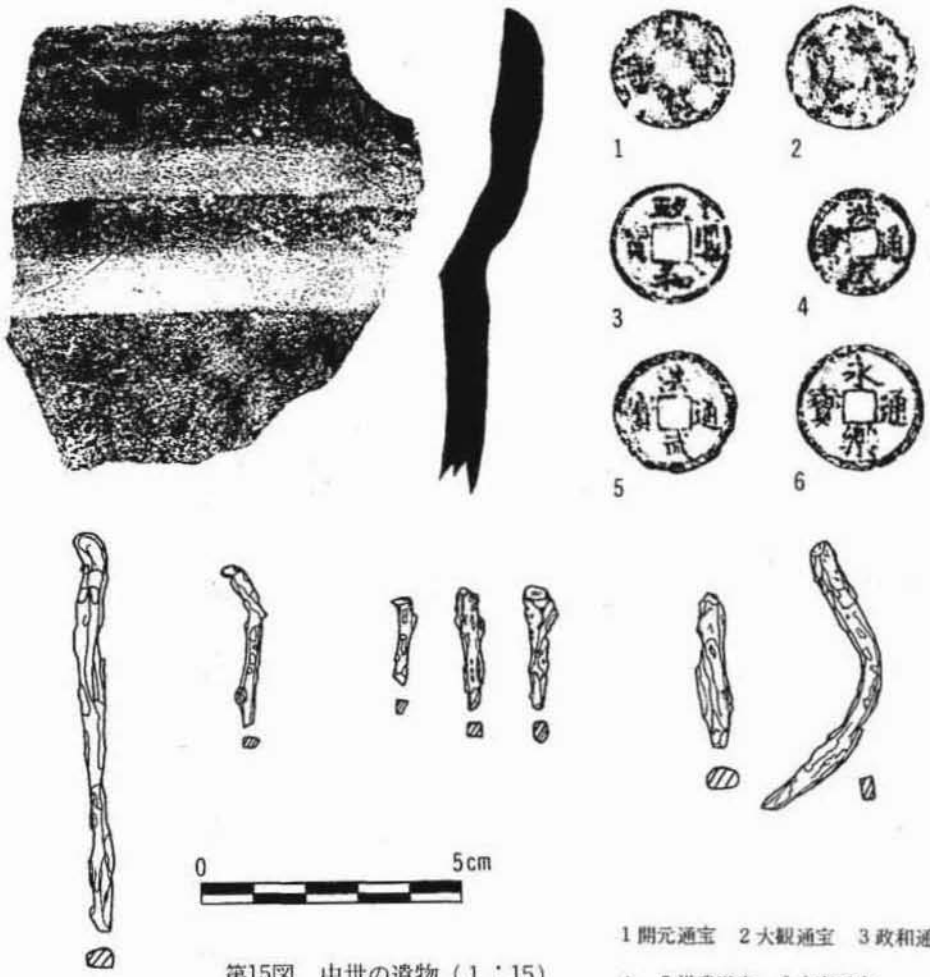

第14図　第1，2号住居址出土遺物実測図

っきり断定できなかった。

以上が遺物のおおまかな説明である。なお小破片のため図示してないが土師器の甕形土器・抔形土器・須恵器の甕形土器・壺形土器・灰釉陶器の抔形土器・皿形土器がある。

本1号・2号住居址は出土遺物から平安時代後半に属するものと考えたい。

（平出一治）




第15図　中世の遺物（1：15）

1 開元通宝　2 大観通宝　3 政和通宝
4，5 洪武通宝　6 永楽通宝

### 3）中世の遺物

中世の遺物は，内耳土器と中国銭並に鉄釘などであった。

内耳土器はすべて破片であったが，15図に示した1点が最も大きく，その特徴を具備していた。

中国銭は計6枚が発見されたが，墓坑の底面近くにあった開元通宝と大観通宝は酸化が進みはっきり読みとれない程であった。

他の4点はいずれも良好な保存状態であり最も新しい鋳造の永楽通宝の存在と，邦製銭のなかったことなどから，墓拡の造営年代の推定が可能であろう。

鉄製角釘は，合計7点が発見できた。これらはいずれも酸化が進みかろうじて形状が判明できる程度であった。

そのうち，最も短い3点はNo.2の墓拡からの発見であり，他の4点は墓拡とは関係なく出土層位などから中世のものと考えてよいだろう。　（平出一治）

## 5．ま　と　め

阿原端下遺跡は以上数項目にわたって述べてきたように縄文時代中期の初頭から中世に及ぶ集落遺跡であった。そして，現代も水田を主とする農耕地として利用されている。したがって，それぞれの時代に生活した人々の生活の痕跡の多くは破壊され当時の現状をとどめる遺構は極めて少なかった。わずかに縄文時代中期初頭の九兵衛尾根II式期の住居址の一部と，平安時代後期の竪穴住居址一基がその全貌を窺い知る手掛りとなっただけであり，その他の遺構は，その存在を確認するにとどまった。

それらのうち，九兵衛尾根II式期の住居址は、黒色土層中に構築された柱穴の無い謂ば仮住い的な住居であったが、土器は破片でありながらこの時期を代弁する標式的な資料であった。

新道式期の住居址は平安時代後期の住居址に完膚なきまでに破壊されていたので，ほんとに存在を確認するにとどまった。

曽利II式期は，住居の入口部に設置されるのが普遍的な埋甕が発見されただけであったから資料価値が薄弱なものであった。

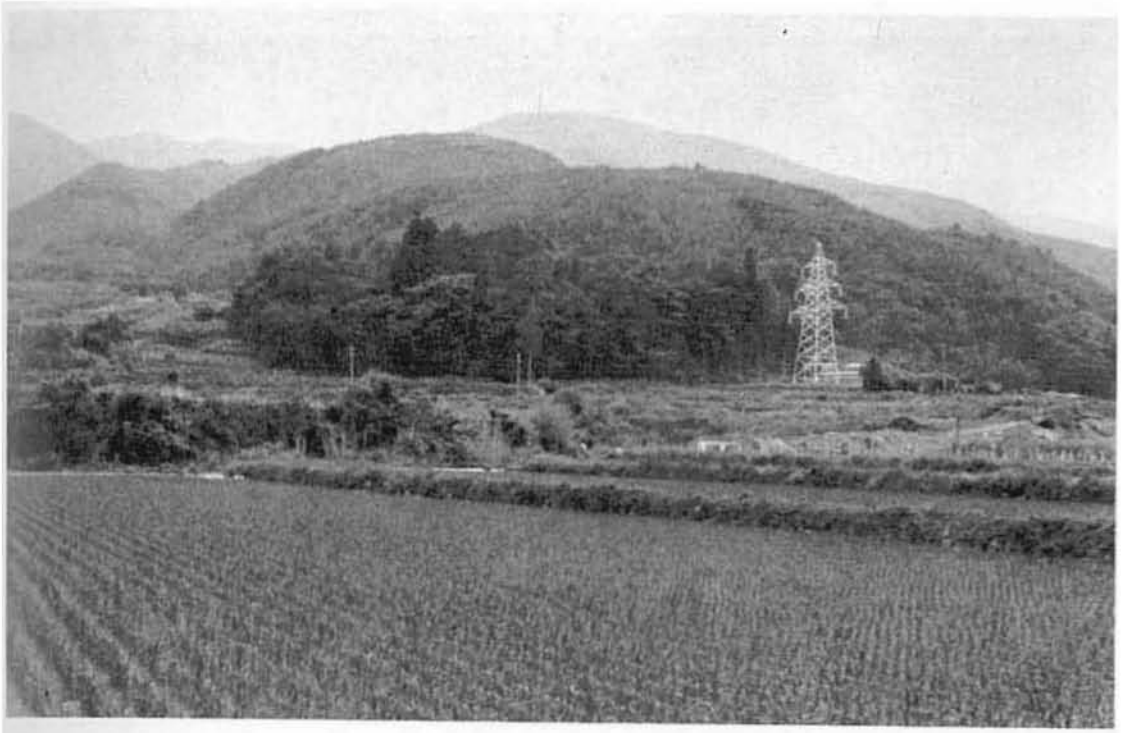
石組土坑も遺構そのものは立派であったが時代考証の決手となる遺物が無かった点が残念であった。

平安時代後期の住居址は，遺構は勿論のこと完形土器こそなかったが遺物も豊富で，この地方を代表する好資料であった。

中世の遺構は3基の墓坑だけであったが，そのうち1基からは中国の古銭6枚が発見され六文銭を副葬する埋葬方法が窺がわれた。

中世の遺構は3基の墓坑以外何も発見できなかったが，鉄製の角釘が7点も発見できたことと内耳土器の破片が比較的多かったことなどから集落の存続が推測できた。

因みに1202年の諏訪郷名改帖によると池生・音骨とともに木ノ間の名がみられ，鎌倉時代初期に集落のあったことが窺え，その後どのような集落の変遷があったのか今後の研究課題として興味深いものがある。　（武藤雄六）



阿原端下遺跡（森の手前）

発掘風景（手前は石組土坑と一号址）

中世の墓坑

石組土坑

2号址の発掘状況

2号址（カマドを復元したところ）と3号址の炉址（右手前）

# 発掘参加者名簿

| | | |
|---|---|---|
| 調査団長 | 教育長 | 小林　繁治 |
| 担当者 | 武藤　雄六 | 小林　公明 |
| 調査員 | 細川　光貞 | 平出　一治 |
| | 折井　　敦 | 田村　和幸 |
| 調査補助員 | 山口　　肇 | 島田　哲男 |
| 参加者 | 樋口すみゑ | 樋口　ゆき |
| | 小林たつえ | 小林　儀平 |
| | 前島かつみ | 堀内　　玉 |
| | 菊地ふたみ | 五味　一価 |
| | 窪田つた子 | 名取みね子 |
| | 樋口よしゑ | 細川　長子 |
| 工事監督者 | 平出　勝一 | 名取　増昭 |
| | 小池　邦治 | |

# 御所平遺跡発掘報告

## 発掘調査の動機

御所平遺跡は，入笠山の東麓の台地上にある。遺跡の周辺一帯は水田と畑地に開拓されているが，丁度，御射山神戸と栗生区の中間にあたっている。ところが栗生区には，ここを通り抜け神戸区の北方に纏った耕作地があり，今まで神戸区を迂回して耕作していた。この不便さを取除き，かつ，その途上の耕地の便をも計る目的でほぼ直線に近い農道を新設することになった。しかし，計画路線内には太郎口・御所平の二遺跡があるため極力遺跡内通過を避けるべく保存運動を展開したが地形や耕地への進入路の取付の関係でやむを得ず、それぞれの遺跡の先端をかすめる結果となってしまった。そこで，事前に発掘し記録保存することになったのである。

調査の結果，太郎口遺跡は縄文時代後期の無文土器破片5点・打製石斧1点・石錐1点と中期の無文土器破片1点・土師器の甕形土器破片2点などが表土中から発見されただけで遺構は全くなかった。そこで，本報告では遺構の存在した御所平遺跡の報告だけにとどめておくことにした。

## 遺 跡 の 環 境

御所平遺跡は，フオッサマグナの断層崖の上に押出した砂礫層の上にロームの堆積がみられ，その上に、さらに小角礫を混じた腐蝕土層がのって形成された台地の付根付近に存在する。遺跡の北寄りで，台地が断層崖に接するあたりには湧水があり，この湧水を利用して水田が作られている。また，遺跡の大部分は畑地となっており縄文時代の遺跡として古くから知られ土器・石器の発見を聞かされていた。

## 発掘調査の経過

発掘は，昭和46年4月27日から行ない最終的に調査の完了したのは5月10日であった。

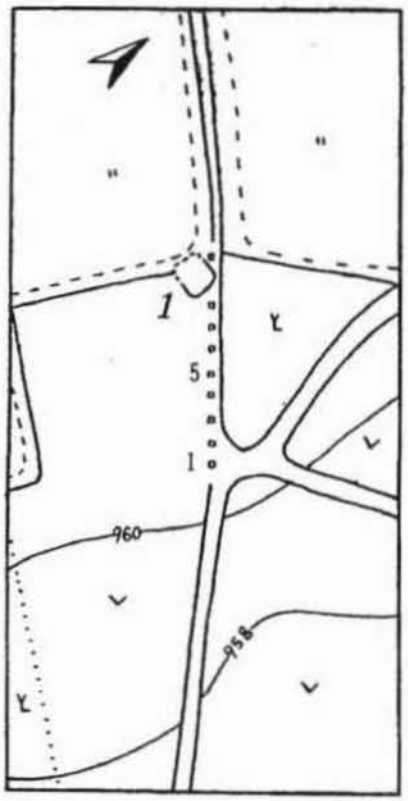
発掘に先立って分布調査を行ない資料を得た。発掘は新設道路のセンターラインにそって60㎝方形の調査穴を3m間隔に設定して行なった。調査穴は10ヶ所であった。

表土（耕作土）は10～15cmで褐色土層に移行し，褐色土層は15cmで軟質ローム面へと変化する層位が確認できた。

表土中には径0.5～2cm程度の小礫が多量に混在していたが，褐色土層以下には全く認められず，小礫を混ずる腐蝕土の押出しの新しいことが判明した。

調査穴の発堀では，№3の地点に径1m深さ70cmの土坑があり，中期中葉から末葉にかけての土器破片が雑然と投込まれていた。精査したところ，この土坑は極めて新しい時代の掘込みであることが判明した。おそらく，畑地開墾の際，出土した土器破片を一括して投棄したものであろう。この時の遺物は土器破片を主体に整理箱7箱に達した。

№4～7の調査穴は，いずれも25～30cmで軟質ローム面に達し，その接触面は平担であって遺構の存在と遺物は認められなかった。



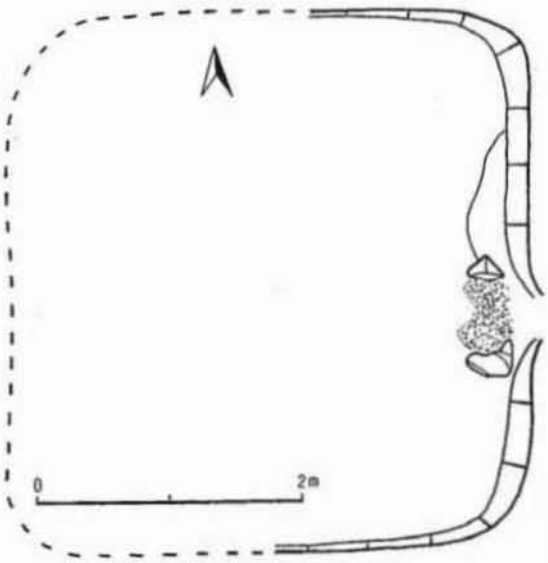
第1図　御所平遺跡発堀地点図（1：1000）

ところが，№9の調査穴の発掘にかかると1m以上の急激な落込みに遭遇した。土層の調査により住居址の埋没が確認できた。この住居址を御所平第1号住居址と呼ぶ。

## 第1号住居址

第1号住居址は，その約半分が畑地に隣接する水田の下に埋没していた。この水田は今年度耕作するため調査できなかった。

住居址内の堆土の堆積状態は、逆三角堆土中に縄文時代中期の土器の細片と凹石が混入し，三角堆土とレンズ状堆土中に師器に破片



第2図　御所平第1号住居址

と須恵器破片および灰釉陶器の破片などが遺存していた。

床面は腐蝕土にロームの混じた貼床で，床の直上からほぼ完形の灰釉陶器1点と半欠土器2点などが発見できた。

東辺の中間には，石積粘土貼りのカマドがあり焚口部には厚さ10cmに達する焼土があり鍔釜の破片と鉄滓とが発見された。

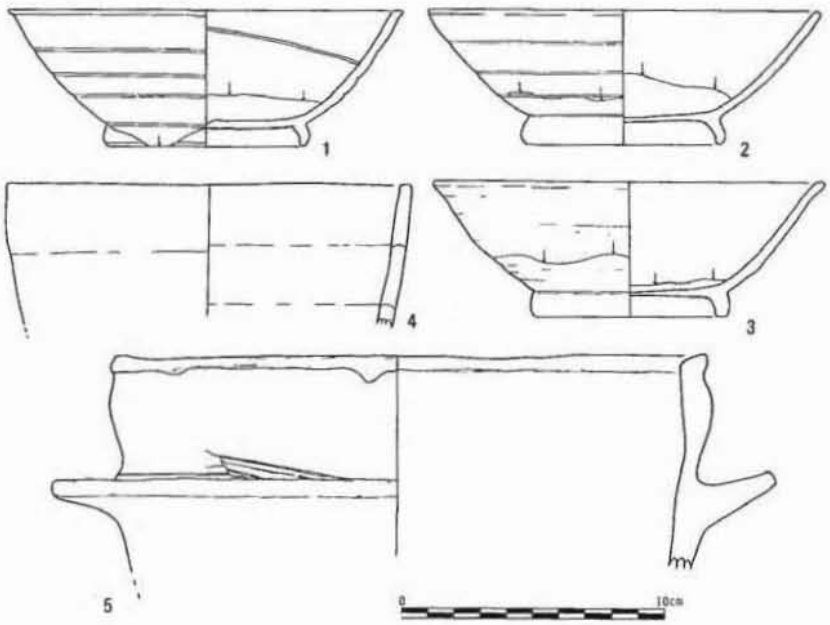
この住居址は推定4m の方形プランで，ロームの側壁が全周するものと推定されるが，床面が貼床のため柱穴その他の遺構を確認することができなかった。

## 遺　　物

遺物は，表採と土坑内発見の縄文時代中期の土器・石器と，第1号住居址発見の平安時代後期の遺物とがあった。

これらの遺物のうち縄文時代の遺物は，表採資料と最近掘られた土坑内発見の資料であることから資料価値の点で劣ることと、今回の報告書が謂ば平安時代特集のようなかたちになったため本報告では第1号住居址発見になる平安時代後期の遺物だけに限って扱うことにした。

平安時代後期の遺物は，わずかばかりの土師器の坏形土器破片と須恵器破片が混入していたが，主なものは図示した灰釉陶器と鉢形土器および鍔釜であった。土器のほかには鉄滓があった。




第3図　1号址出土土器実測図

3図1は，完形の高台付坏形土器で胎土はやや粗く褐色を呈している。釉は内面の底部を楕円形に残すが外面は高台まで達している。またロクロ整形痕が外面に特に著しい。

3図2は，全体の⅓程度の破片で高台付坏形土器である。胎土は灰色を呈し焼成は良い。釉は内外面ともに不整形に付着している。ロクロ整形痕は外面で特に著しい。

3図3は，わずかに器形の判別できる破片でやはり高台付坏形土器である。胎土は灰白色で焼成は極めて良好である。釉は内面で底部を円形に残し外面は不整形に付着している。ロクロ整形痕はやや弱い。なお，高台の接地面を平に篦切整形している。

3図4は，やや厚手の土師器の鉢形土器である。胎土は細いが金雲母を含む茶褐色で焼成の悪い土器である。

3図5は，凝灰岩末を多量に混入した厚手の鍔釜で焼成は悪い。器形は下胴部以下を欠くが，典形的な鍔釜の形態を示すだろう。ほぼ平担で内傾する折返し口唇の直下にはやや上向きの鍔が巡り，さながら中期縄文土器の有孔鍔付土器を想わせる。

鉄滓は，10×5×2.5cm の大きさで赤黒色を呈し 268g もの重量があった。

## ま　と　め

今回の調査では，太郎口遺跡で遺構が発見されず，縄文時代中期の遺跡とばり考えていた御所平遺跡では縄文時代の遺構が発見されなかったかわりに平安時代後期の住居址が発見されるなどアクシデントが多かった。

なかでも御所平第1号住居址の場合，カマドが本来隅に来るべきのが，中央やや南寄りで中央に偏しているのが最も注意される点であった。次に，4のようなあまりみかけない鉢形土器の存在である。この土器は5の鍔釜と同じく輪積整形によるもので類例の少ない土器である。それから，土師器の坏の小破片が2～3点ということも有り得ることだろうが不思議であった。

今回の調査は発掘面積が限られていたため極く局部的な見解しか得られなかった。

本報告を発刊するに当り発掘に参加した細川光貞・岩佐今朝人・小林公明・小林良交・内山直三の諸氏に感謝の意を表したい。

（武藤雄六）

阿原端下遺跡発掘調査報告
付　御所平遺跡発掘報告

1976年　11月　20日

発行　富士見町教育委員会

印刷　栂　印　刷

（非売品）